

「十九世紀初期ローウェルにおける女性労働者」

西洋史米班 百地 慈

△はじめに▽

十九世紀初期のニューイングランドにおいて、綿製造所の設立は資本主義生産の始まりであつた。一八五〇年以前では、マサチューセッツのローウェル織物製造所は、有名な経済及び文化的注目の的であつた。これらの製造所の規模の大きさ、動力機械の驚くべき生産、そして女性とその工員の大半を占めていたという事実は、人々の興味を呼び起こした。その光景はイギリス産業革命の陰うつな製造所と鋭く対象をなしていた。

ここでは、まず ローウェルの女性社会 (community) が発展した要因を、次にローウェルでの労働運動を取り上げてみよう。

(1) ローウェルの概観

一八二〇年、そこには都市など影も形もなかった。ただ東ケルムスフォードのメリマック川沿いに数十世帯が住んでいるにすぎなかった。しかし、一八二一年、ボストンの資本家の一団が川と近くの水路沿いの土地及び水権を買い、主な織物工業センターを建て始めた。二年後に開いた最初の工場は、近くの田園から補充された女性ヤンキーを雇った。一八四〇年頃迄に追加して製造所が造られた。三十二の工場を持ち、一千万ドル以上の価値がある十の織物会社が川と水路の近くの

堤防に並んだ。^① 工場の隣りには会社の寄宿舎や八千人の工員達に便宜を図る借家が列をなした。

ローウェルが広がり 国の最大の織物マニファクチュアセンターとなるにつれて女性工員の技術も変化した。ローウェルやその他の農場の数の増加は競争という圧力をもたらした。生産過剰が問題となり、仕上がった布の価格は下落した。始めのうちの高利益は下降してしまい、製造所の工員の条件も同様に低下した。賃金縮小にもかかわらず、仕事のペースは増した。女性工員はこれらの変化を同の抵抗もなく受け入れた訳ではなく、一八三四年及び三六年にストライキを執行、一八四三年から四八年の間には労働時間縮小キャンペーンを行なった。(II) ローウェルの女性社会の発展——一八五〇年以前、製造所の女性達は毎日の生活の中で危険な時にはすぐに結合できる相互の絆をつくつた。

(A) 「社会」の意味

初期ローウェルの女性工員社会の基礎を調べる前に、「社会」がどんな意味でつかわれているかを簡単に述べておこう。彼ら女性達は、外部者と断絶された一つのグループであつたとされている。それは相

互扶助の絆が発達した為である。当時彼らはお互いにあるいは工員のより大きなグループを頼りとしており、その技術は複雑に絡み合っていた。「社会」は彼ら女工達にとって主観的にも客観的にもその特徴をなしていた。

(B)発展の要因——ローウエルの女性社会が発展した要因は、大別して次の三つが考えられる。仕事の構造、工員の生活条件、労働者の同質性、この3つである。

(i)仕事の構造としての要因

初期ローウエルの女性達の相互扶助は製造所の構造自体に根ざすものである。新参者は特に同僚の工員を頼った。が、熟練した者でさえお互いに助け合い、頼り合っていた。

新しい工員が仕事を覚えるのは困難であつた。しかし女性達は数ヶ月後には熟練し、工場に満足するようになった。^②織物会社は新しい工員を楽に調整できるよう準備を整えた。新参者は、初めは代用の働き手としてあてがわれ、仕事の量にかかわりなく日給を支払われた。^③新参者は熟練者と組み、熟練者は複雑な仕事を教えた。代用の働き手はそのパートナーの為に時間をさいたり、時には休んでいるものの代わりにも働いた。

ある女性が“Offering”に再記録された手紙の中でその仕事の学習過程を述べている。

『ええ、私は製造所へ行き、とても忍耐強い女の人に教えてもらうことになりました。……それがどれ程半破なものに思えたことか：……彼女達は私に糸を通させたり、織機のねじをしめさせたり、そん

なことばかりでした。そして今、私は一台の織機を動かせる位に進歩しました。もしうしろに目があれば二台面倒を見られることでしょう。』^④

仕事が最も難しい最初の一月を、彼女は他の女性労働者に訓練され、助けられ、頼ってきたのである。女性達は仕事の過程で頼り合っていたのであり、単に機械を動かす中だけではなかった。労働力が高まるにつれ、女性達はペアで働くようになった。^⑤この相互作用は監督の見えないところでのみ行なわれるような不正なものではなかった。むしろ、公式に組織され、認められていた。

代用の働き手の統合につけ加え、非公式な仕事で正式の工員の間で続けられた。一人が短い休日を楽しもうとか病気だとかで半日ないし一日休めば、同僚がその欠席分の機械を見てやった。^⑥給料は全生産量で決定されるので、女性達ははばまるまる給料を手に入れた。このような非公式の分け前も労働時間中の相互扶助を発達させる一要因となつた。

(ii)生活条件としての要因

生活条件も女性工員の社会の発展に貢献した。ローウエルの製造所で働く女性の大半が会社の寄宿舎に住んでいた。^⑦その上、他の住民と相互に影響しあう機会がほとんどない。^⑧25人収容の典型的寄宿舎は、一つのベツトルームに四人から八人をつめこんだ。^⑨この住宅でプライバシーはほとんど保てず、グループに従わせるという圧力が非常に強かった。製造所で発展した工員の社会は家庭生活へも持たされたのである。

寄宿舎の中で新参者はアウトサイダーからメンバーへと受け入れら

れた。彼女らの殆どは姉やいとこ、友人等、知人を頼りにやって来た者である。その知人は既にローウェルで働いている。^⑩ハミルトン会社の帳簿では、同姓、同出身（北ニューヨークランドの同じ町の出身）の工員の大半のペアが同じ寄宿舎に住んでいた^⑪としていた。工場での長い一日のあと、寄宿舎は女性工員の社会生活の中心であった。日常生活を共にする友人も仕事場や寄宿舎の同僚から見つけた。新参者が同僚と最初に触れ合うのは、製造所ではなく、寄宿舎なのである。

雇用も主だったものは個人的なものである。一つの寄宿舎に住みついたら、友人や寄宿舎の管理人と共に製造所へいく。もし開業する製造所があればすぐにでも働ける。

寄宿舎へ入ったら、新参者は工員社会の標準に従わねばならない。

この大きな社会の習慣や価値に従わずに生きていくことは非常識であり、とても強い意志を持った個人なのである。^⑫この社会が普及するにつれ、人々はそのグループの標準に従わないと強い圧迫を加えられるようになった。その社会は、話し方や服装だけでなく、道徳という無言の法典までも強制した。ローウェルの牧師、ヘンリー・マイクヘーリー Mikes は、道徳の指示から逸脱した者は社会から圧力をかけられると述べている。

「非道徳的であるという疑いのある少女や全く無作法な少女は、一時にして配役をおろされる。もし管理人がその娘をクビにしないならば、同僚達は直ちにその家を出ていくだろう。従って、彼は自己防衛の為、反抗者を解雇せざるを得ない。少女の友人も、もう彼女と共に

歩いたり働いたりしないであろう。自分がどこでも噂され、指さされ、避けられているとようやく解った彼女は、不名誉をもたらした態度をとり除いて同僚を安心させてやらねばならなかった。……」^⑭

これは極端な言葉に聞こえるが、事実なのである。女子工員の社会は総じて、一日二十四時間を共に働き、共に生活する中で発展したのである。

(iii) 労働者の同質性

仕事の構造と住居に加えて、製造所の労働者が同質であることも一つの要因である。当時、製造所の労働者は性や出生、年令の点で同質であった。ハミルトン会社の給料支払い簿や記録によると、一八三六年の七月に雇われた人々の85%以上が女性で、その96%が生え抜きの人であった。^⑮その上、80%以上の女性労働者が15才から30才であり、10%だけが14才以下あるいは40才以上であった。^⑯又、労働者は人種的にも同質であった。ハミルトン会社で三六年七月に雇われたうち、わずか34%が移民であった。おまけに彼らはハミルトン会社の寄宿舎の住人をたった3%含んでいるだけなのである。^⑰女性工員の社会はローウェル周辺のニューヨークランド系の女性で成り立っていた。結果として、熟練者は新参者の話し方や衣服をからかったが、彼女らもまた「しゃがれ声」の「田舎者」だったことがわかっていたのだ。

労働者の同質性は、仕事の構造や労働者の寄宿という情況を考えた場合、特に重要であったと言えるよう。

以上のような三要素は、女性工員が日常生活で男性と殆ど影響を及

ばし合っていないことを示している。女性は女性の社会の中のみ生きていたのである。

(Ⅲ)初期ローウェルにおける労働運動——初期ローウェルの労働運動としては、一八三四年のストライキ、及び請願キャンペーンがあげられる。

(A)一八三四年ストライキ

一八三四年二月、ローウェルの八百人の女性工員がストライキに走った。賃金切り下げに反対する為である。多くの製造所を行進し、戸外での示威運動を行ない、和解できるまで労働を停止するよう呼びかけた。彼女らの申請は次のように決議している。

——決議する。我々は、かつてのように賃金が支払われ続けないならば、製造所へは戻らない。

——決議する。もし家へ帰るのに十分なお金がない者があれば供給しなくてはやるべきである。⁽¹⁸⁾

このストライキは賃金切り下げの取り消しを手短かに示した。しかし代理人達はこれを快くは思っていなかった。彼らはそれを女らしさがなく、恩知らずだとみなした。このストライキを起こした主な理由は、第一に、賃金切り下げは、彼女達ヤンキーの天性の主要素⁽¹⁹⁾である威厳と社会平等の感覚をひそかに傷つけたため、第二に、これらの賃金切り下げは、彼女らの経済的独立への一つの挑戦であるよう思われため、である。ここで、彼女らの言う「独立」は次の二つの要素を持つている。①彼女達は、製造所で働いている間自活をしている。従って、家にいる彼女達の家族から独立している。②彼女達は毎月の稼

ぎから貯金ができる。そして望めばいつでも製造所を離れて古い家屋敷へ戻ることができる。この二点である。彼女達の独立は主に製造所で的高賃金に基づいている。彼女達は生活を支えながらも定期的に家へ帰るに充分なお金を貯めていた。従って賃金縮小は彼女達のこの感情のはけ口を否定してしまう恐れを持っていた。彼女達は賃金縮小を「奴隸化」の努力、つまり「自由民の娘達」としての独立した身分を奪うための努力であると解釈したのである。⁽²⁰⁾

結局このストライキは失敗に終わった。賃金切り下げは取り消されなかった。金曜日にストライキを起こしたが、土曜日には前のままの賃金が支払われ、女工たちは翌週の中頃までに街を去るか仕事に戻るかせねばならなかった。ストライキを起こしてから一週間とたたぬうちに製造所は許容量いっぱいまで仕事をこなしていたのである。⁽²¹⁾

しかしこのストライキの意義は成功したか否かにあるのではなく、それが起こったという、そのこと自体にあるのだ。ストライキによって女性達は自分達自身が従属者であることに強制的に反対したのである。彼女達の伝統的概念、つまり自由民の娘達という概念がストライキに果たした役割りは大きい。だがこれが一八三四年のストライキのきっかけとなった訳ではない。緊密な「社会」の賃金切り下げに対する個人的反抗が集団的反対へとかわったのである。要するに、「社会」が運動の母胎となったのである。

(B)一八三六年ストライキ

一八三六年十月、女性達は再びストライキを起こした。この二度目のストライキは一度目のそれといくつかの点で似通っている。例え

は、その直接の原因は、やはり賃金切り下げにあり、行進や大規模な戸外での示威運動が組織された点、又その根本目的は達せられなかった点等である。

これら二つのストライキは表面上よく似ているにもかかわらず、実際的な違いが幾つかある。まずはその規模である。一八三四年の八百人に比べ、一八三六年には千五百人以上の工員がストライキを行なった。²² 期間も、前者が二三日であつたのに対し、後者は数箇月間であつた。又、組織化の面でもかなり進んでいた。彼女達は女工連合(Factory Girls Association)をつくつた。ある歴史家によると、²³ 一時的な提携者は最高二千五百人に達したという。又、彼女達は要求を勝ち取る為、製造所を休業させるよう慎重に努力を重ねたり、製造所の過酷な面に集中して口説いたりして、態度のはつきりしていない工員を説得した。女工連合の組織化と製造所の休業への働きかけで女工達は変化しつつあつた。彼女達は、織物法人の負担によって傷つけられている「自由民の娘達」としてだけでなく、製造所内での地位を向上させるという産業労働者の意志として行動したのである。

③十時間労働キャンペーン

一八三七年から四三年にかけて二度の賃金切り下げが行なわれた。²⁴

当時、産業の縮小や一時休職が頻繁に行なわれた為、賃金を下げるか全く工場を閉ざしてしまうかをせねばならないという製造所側の主張を労働者達は受け入れたであらう。しかし、財力が復帰し産業の拡大が行なわれた一八四〇年代中葉では、女性間の労働運動が再起した。

(彼女達の行動は男性労働者のそれと平行している。) 一八四〇年代

はストライキがなかった。むしろ彼女達は定例の申請キャンペーンに熱を入れ、国の立法部へ労働時間を制限するよう呼びかけた。一八四五年及び四六年にはそれぞれ最高二千人及び五千人の工員が申請に署名した。しかし賃金切り下げ、スピードアップ、産業の拡大のいづれも押さえることができない為、工員達は一日の労働時間を減らすことによってこれらを軽減しようと考えた。所謂十時間運動(Ten Hour Movement)である。

相対的に永久的な労働組織や申請が女性の間で成功したことが、一八四〇年代の十時間運動の明確な特徴である。ローウェル女性労働改革同盟(Lowell Female Labor Reform Association)が一八四五年に結成された。それはニューイングランド労働者同盟と合併し、会合に代表者を送つた。それらは他のグループと提携はしたが自治権は守つていた。女性達は「ファクトリートラクト(Factory Tracts)」という小冊子を出し、製造所の条件をさらけ出したり十時間労働について討論をしたりした。²⁵ 又、教育や統制の為「産業の声(Voice of Industry)」を発刊した(一八四五―四八)。「女性部門(Female Department)」は製造所の女性達が書いた手紙や記事をのせていた。

十時間運動でローウェルの初期労働運動は区別されるのであるが、それは男女両方を含んでいた。時を同じくして女性労働改革同盟と男子メカニック・労働者の連盟ができた。後に二つのグループは共に働くようになり、それぞれ運動に貢献した。女性が製造所の80%を占めていたのであるが投票権については男性が占めていた。十時間運動は

政治問題である為彼ら男性が決定的役割りを果たした。最終的に運動を成功させる為には男性選挙人及び立法部に頼っていたのである。しかし十時間運動において顕著な役割りを果たしたのはむしろ男性よりも女性達であった。^{②⑥}十時間運動の中では、女性に独立して組織しており、^{②⑦}明らかに日常生活での男女の別は当時の十時間申請に反映されていたといえよう。

十時間労働がローウェルから他の町へと広がっていく過程は、大運動の中で女性の独立した組織の広がりを表わしている。後にこれらは男女で分かれ、それぞれが別個に組織を持つことになる。

へおわりに▽

ストライキ及び十時間運動は女子工員の緊密な社会に頼っていた。その社会は①相互扶助の上に構成された仕事であったという労働の構造、②生活を共にする寄宿舎で暮らしていた事実、③労働者の同質性に基ついている。社会の感情は、会社と寄宿舎での生活の中から発展したのである。

一八五〇年以前のローウェルの女性達の経験は産業の資本主義の矛盾した影響をあらわしている。繰り返して起こった労働運動は女性工員が過酷な雇用と感じていたことを表わしている。同時に、製造所は女性を家や家族と分けてしまった。従って彼女らには先例のない独立が授けられたのである。ローウェル製造所は女性を搾取し、又、解放したといえよう。

注)

① Statistics of Lowell Manufactures, January 1, 1840. at Thomas Dublin "Woman, Work, and Protest in the Early Lowell Mills: 'the oppressing hand of a varice would enslave us'. (以後WWPへ略記) in Class, Sex, pp. 43-63.

② Ibid. IV, p145-148, 169-172, 237-240, 257-259.

③ Hamilton Company (以下H.C.)の給料支払簿によると一八三六年七月には全女子の1/5が代用の働き手であった。(Dublin, Women at Work: The Transformation of Work and Community in Lowell, Mass, 1826-1860, passim. (1975).

④ Ibid. IV, p170

⑤ 一八三六年七月にH.C.に雇われた女子の40%以上がペアで働いていた。

⑥ Harriet Hanson Robinson, Loom and Spindle, Or Life Among the Early Mill Girls (New York, 1898). p91 in WWP. p61

⑦ H.C.の場合、ほぼ3/4の工員が一緒に生活していた(一八三六年七月)。(Dublin, opcit chap. 4)

⑧ 週73時間労働で七時ないし七時半に仕事終了、夕食から十時

の消灯まで会社の外部にいる人々と共に過す時間はほとんどない。

⑨ Opsit, chap. 5

⑩ Ibid. II. pp. 145-155; I, pp. 2-7, 74-78

⑪ Hamilton Manufacturing Company Records, vol. 283, passim. in WWP, p. 62.

⑫ Ibid. I, p. 5; IV, p. 148

⑬ 鼻にかかった独特の話し方を好み、又服装は都会的なものを選んだ。

⑭ Henry A. Miles, Lowell As It Was And It Is, (Lowell, 1845), pp. 144-145 in WWP, p. 62.

⑮ これらの統計はH.C.の給料支払い簿及び登記簿に基づいている。

⑯ これらのデータは、H.C.の寄宿舎に住んでいる女性の年代区分の分析に基づいている。

⑰ Federal Manuscript Census of Lowell, 1830 in WWP, p. 62

⑱ Boston Evening Transcript, February 18, 1834 in WWP, p. 62

⑲ ヤンキーの世襲財産ともいふべき天性は“daughters of freemen”の言葉に集約される。つまり、イギリスから独立を手に入れた「愛国派の祖先」の血を受け継いでいるというもの。

⑳ 彼女らによれば、「賃金切り下げは製造所の雇用が将来隷属状態になることを予想して」おり、ストライキによって「女性は製造所での実地的な経済的独立と、『まだ自由民の娘である』という決意

を表明した。」のである。

㉑ Lawrence Manufacturing Company Records, Correspondence, vol. MAB-1, March 4 and March 9, 1834. in WWP, p. 62

㉒ Robinson, opsit., p. 83; Boston Evening Transcript, October 4 and 6, 1836. in WWP, p. 62

㉓ Hannah Josephson, The Golden Thread: New England's Mill Girls and Magnates (New York, 1949), p. 238

㉔ Hamilton Manufacturing Company Records, vol. 670, in WWP, p. 63

㉕ John R. Commons et al. A Documentary History of American Industrial Society (Cleveland, 1910), vol. 3, pp. 133-151 (引用したもの)。

㉖ ニューハンプシャーでは、一八四五年十二月、千人以上の工員が十時間を訴えたが、その2/3が女性であった。

㉗ 一八四五年には二度の申請がなされたが、一度目の申請者はその署名者のほぼ90%が女性であったのに対し、二度目のそれは2/3以上が男子であった。

(筆者は31期生)